忘れえぬ君へ

太美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れえぬ君へ

【Ｎコード】
Ｎ９５２７Ｄ

【作者名】
太美

【あらすじ】
目の前に現れた、高校の同級生。同窓会をきっかけに、恋へと急展開していく。まっすぐな恋の行方。

彼との出会いは、高校の同窓会でだった。社会に出て2年目、ちょうど仕事が面白くなってくる頃だった。２４歳になる年、周りでは結婚のラッシュだった。中には高校の時に付き合ってたカップルが結婚、何てこともあった。私はというと、ちょうど大学時代に付き合ってた彼と仕事でのすれ違いから別れてしまい、仕事に生きるぞと決意を固めてた頃だった。そんな時に舞い込んだ同窓会の通知。少し早い気もするけど、少しでも現状打破できればと思って参加した。そんな中に彼がいた。学生時代から一風変わってる奴だった。社会人になった私は少し見栄を張って、いかにも仕事出来ます風の高めのスーツで参加した。会場もホテルの一室で、懐かしい顔ぶれが出迎えてくれた。その部屋の奥のテーブルの近くに座ってる彼。学生時代にあまり話したことは無かったけど、彼がどうとかいう会話に入りたくなかった私は自然と彼の近くに座った。

「どうも、久しぶり。覚えてる？」

「覚えてるよ、多分。女はすぐに変わるからわからないけど・・・・・一応名前、教えて」

ぶっきらぼうな物言いは変わってない。名前を告げると

「やっぱり。覚えてたよ。」

彼は不思議と安心する雰囲気をかもし出してた。お酒の力も借りて、つい身の上話まで話してしまった。仕事の事、彼との別れと愚痴のオンパレードだった。そんな話を彼は黙って聞いてくれた。

「お前さ、何で仕事してるの？」

「えっ？」

考えたことも無い質問にあせる私。そこから彼はゆっくり話した。

「せっかく目標に向かって大学入ったろ。で、その後夢を持って社会に出たんだろ？お前のやりたい仕事って何？」

急に酔いが醒めた。いきなり久しぶりに会ったのに、いくら酔いも

手伝ったとはいえ、失礼な事をしたと思った。
「ごめん・・・・・・・」
私はこの言葉を伝えるのが精一杯だった。
「ちがう、別に非難するつもりは無いんだ。ただ、周りの奴の殆んどがそう言うから・・・・・
　傷つける気なんてなかったんだ。こっちこそ言い過ぎた、ごめんな。」
彼は大学院まで進み、その後研究所に入って、今は何かを開発中らしい。何を開発中か一応聞いたけど、あまりにも難しすぎて忘れてしまった。毎日実験をして、結果をパソコンに向かってキーを叩く。そんな味気ない毎日らしい。人間と会話するのも久しぶりとのこと。
「じゃぁさ、こんな私とでよかったら遊びにいかない？」
「はっ？？？？いいけど、いつ行くんだよ？それにどこへ？」
「今度休みいつ？私明日休みだけど・・・・・・」
「俺はいつでも休めるさ。」
「じゃぁ、遊園地でも行っとく？」
「ガキじゃあるまいし・・・・・・」
「いいじゃん、行こう。決定ねっ！明日何時にする？」
「マジかよ・・・・・じゃ、車で迎えに行くよ。家教えてよ。
　あっ、俺今日車だ！このまま送っていくよ。」
私は戸惑った。せっかく来た同窓会だし、会費も払ったのに・・・・・
・
でも、ここにいても退屈だし、いっそ抜け出した方が面白いかも・・・・・そう思って彼と会場を後にした。地下の駐車場で彼の車に乗った。カーナビに住所を入力。車は走り出した。
「実はさ、学生の頃、お前の事好きだったんだよね。今だから言っちゃうけど。」
「えっ？？？？？」
「話しかけられてびっくりしたんだ。いきなりかよぉ～～ってさっ。

」
「うん・・・・・・・・・・・・・」
「そしたら急に男の事とか、仕事の事話し出すだろ。おいおい、思い出語り合う場所じゃないのかよって思ったんだ。」
「ごめん・・・・・・・・・・・・」
「いいよ、家には送るから、ちょっと寄り道していい？」
「うん」

それから、無言のまま運転する彼。どれくらい走ったんだろう？私は少し寝ていたみたいだ。ふとフロントガラスに目をやると、そこは夜景のきれいな丘に来ていた。
「俺さ、煮詰まったりするとここに来るんだ。夜景をみてると、俺の悩みなんかちっぽけな気がしてさ、明日の活力が沸くってやつ？なんか、元気になるんだよ。」
そう言って彼は景色を眺めてる。みんな悩みなんていろいろある。街はそれを飲み込んで、それでも明るい灯りを燈し続けてる。そう思うと、私はなんて小さいんだと思えてきた。気がつくと涙が止まらない。声を殺して泣いていた。そんな私を彼はそっと抱き寄せた。
「どうした？大丈夫か？」
「うん・・・・ごめん。ちょっと胸を借りるね。」
「薄い胸ですけど、ご自由に」
そう言って更に優しく抱き寄せた。彼の優しさに改めて涙がでる。しばらく抱きあった後、どちらからともなくキスをした。今まで感じたことのない優しいキス。そのまま、彼は私の家に泊まった。何もせず、ただ抱きしめられて眠りについた。暖かいオーラに包まれて、私は深い眠りに落ちた。翌朝は遊園地ではしゃぎまくった。それ以来、私達は付き合い出した。お互い、心地よい空気を感じながら・・・・
飾らず、無理せず、お互いの気持ちのいい時間を過ごしていた。

そんな中、彼が実験で研究所に泊り込みが続くと、手紙が届くようになった。メールや電話だと自分の本当の言葉が出てこない、と言うのが理由。彼は携帯もパソコンも持ってるのに、やっぱり相変わらす風変わりな彼だった。私も返事を書く。ふと気づけば、愚痴が減ってる。逢えない時間は多いのにもかかわらず。これは不思議な事だ。やぱり、愛情をきちんと受けてると、自分も成長する事がわかった。

もちろん、休みの連絡は携帯がなる。久しぶりに携帯がなったので、大急ぎで出た。

「もしもし、俺。明日会えないかな?」

「仕事が終わってからでもよければ、大丈夫だけど・・・・」

「了解、じゃぁ、仕事終わったら連絡して。」

そう言って電話は切れた。微妙に声のトーンが違った。何かあったのかな?少し心配。でも、ここ数日研究所に泊り込んでた疲れがでたのかな・・・・なんて思ってた。心配よりも、久しぶりに逢える事が嬉しくて仕方なかった。明日は、お気に入りのスーツで出かけよう・・・・そう思って眠りについた。

「もしもし、私。今仕事終わったけど、どうしよう?」

「今、どこ?」

「会社に戻ってるけど・・・・・」

「了解、じゃぁ今から行くよ。いつもの所で待ってて。」

私はいつもの店に行った。そこはゆったりとした音楽の流れるカフェ。本を片手に彼を待つ。

「お待たせ、遅くなっちゃったね。ごめん。」

「いいよ、ちょうど本も読みたかったから・・・・」

「実は、話があるんだ・・・・・・・」

なんだか、気まずい雰囲気になった。私は内心すごく不安になった。

多分、今にも泣き出しそうな顔になってる。とにかく、返事をしなくっちゃ・・・・・・・

「話って・・・・・・・なに？」

「実はさ、俺シカゴに行く事になったんだ。」

何でも、彼の研究の論文が評価され、シカゴの研究室からお声が掛かったらしい。施設的にもすごく充実してるから、彼としては行きたいらしい。でも、行くと日本には戻らないらしい。そんな事を話してた。私は半ば上の空で話を聞いてた。聞くというよりは、耳に勝手に入ってくる感じ。店のＢＧＭと同じ感覚だった。

「で、一緒に行かない？」

しばらくは、言われた事に気づかないでいた。彼のまっすぐな瞳を見つめてた。

「ねぇ、聞いてる？これって、結構勇気のいる話をしてんだけど？？？？」

「シカゴにはいつ行くの？」

「来月だけど・・・・で、答えは聞けないのかな？」

「答え？？？？？」

「聞いてたのかよ？一緒にシカゴ行かないか？」

「シカゴってアメリカの？？？？」

「そうだけど・・・・で、そう？」

そう言われてすぐに返事なんて出来ない。出来るわけが無い。彼について行きたい。でも、全く知らない土地、しかも英語圏。仕事だって辞めないといけない。一気に難題が降りかかる。親にだって話さないといけないし・・・・・とりあえず、返事は少しだけ待ってもらう事にした。

いろいろ考えた。こんなに居心地のいい彼との別れは考えられない。ついていきたいけど、仕事だって急にやめれない。せっかく大きな

プロジェクトのチーフになった所なのに・・・・・せめて、成功させてから退職したい。シカゴに行って、私にする事、出来る事があるんだろうか？両親だって説得しないといけない。これって、結婚って事なのかな？彼の真意が見えない。数日後、悩みは膨らむ一方なので彼に話すことに決めた。私の胸のうちを聞いてくれた彼は、車を走らせてあの夜景のきれいな丘に連れて行ってくれた。

「俺さ、いい加減な気持ちでシカゴに誘ってないよ。両親にだって会うよ。でも、その前に、お前の気持ちが知りたい。仕事も大事なのはわかるけど、俺と一緒にいたい？俺はお前と一緒にいたい。お前とならどんな事も乗り切れる気がする。」

私は、またあの夜のように、自然と涙が流れてきた。彼はあの時と同じように優しく抱きしめた。片手で私の頭をなでながら・・・・・・・

「私も一緒にいたい。離れたくない・・・・・・・・・・・」

「ありがとう。これで、安心して行けるよ。その前にご両親に逢わないとね・・・・・」

急遽決まった結婚に海外移住。頭の固い私の父親は猛反対。結果は明らかだった。

シカゴに行く日が迫ってるのに、彼はのん気なものだ。私は毎晩、実家に電話して父親を説得した。

「おまえ、仕事はどうするんだ？むこうに行ったら何するんだ？毎晩彼が帰ってくるのを待つだけじゃないのか？それに、英語は話せるのか？騙されたりしないのか？」

毎度同じ事を言われて電話が切れた。

とうとう、彼がシカゴに発つ日が来た。私は任されたプロジェクト

を最期に会社を退職する事を決めた。後は父親の説得。空港に彼を見送りに行くと、笑顔の彼がいた。

「じゃぁ、向こうでまってる。落ち着いたら話し合いに戻ってくるよ。」

「ありがとう、でも無理しないでね・・・・」

「大丈夫、メールするよ。手紙じゃ到着遅いからね・・・・・」

そう言って優しく抱きしめられキスをした。暫く逢えない彼。研究室にこもってると思えば耐えれるはずなのに、現実はうまくいかない。やっぱり涙が止まらない。

「一生のお別れじゃ無いんだから・・・・・待ってるよ！」

そう言って彼は搭乗口に消えていった。

3ヵ月後、やっとプロジェクトも大成功に終わり、私は無事に退職した。一人暮しの部屋を引き払って、暫く実家に居候する事にした。目的はもちろん父親の説得。母親は同じ女性なので、私の気持ちを察してくれた。実家に戻ると、母親に買物に付き合わされた。私は運転手だった。

「実はね、あなた達が挨拶に来たでしょ。あの日から毎晩、定時に彼から電話があるの。お父さんあてにね。で、毎晩話してるのよ。最初のうちはすぐ切ってたのに、段々話す時間が増えてるの。もう、アメリカなんでしょ？時差だってあるのに・・・・最近はお父さん、時間が近づくと落ち着きが無いの。笑っちゃうでしょ。時間の問題よ。あともう一押しってとこね！」

お母さんに聞くまで知らなかった。電話で毎晩何を話してるんだろう？あんなに忙しいのに・・・・・・彼の身体も心配になった。彼の努力も実を結び、私が実家に戻って1ヶ月を過ぎた頃、とうとう電話越しにお父さんが話してた。

「そんな大事な事は、電話じゃなく直接きて言いなさい。」
電話を荒々しく切ると、無言のまま部屋にこもってしまったお父さん。私は慌てて彼にメールを送った。すると、すぐに返信があり明後日、日本に戻ってくるらしい。私は空港まで迎えに行く事にした。久しぶりの再開。喜ぶ間もなく、車を実家へと走らせた。車内では向こうの生活を色々聞いた。楽しくやってるみたいだった。なんでも、仲間に私の事を話してるらしく、早く呼べ呼べとうるさいらしい。いったい、何をどんな風に話してるのか心配だけど・・・・・・・実家に着くと彼はお父さんの待つ応接室に向かった。私は部屋の外で待たされる。

ものの数分がすごく長く感じた。
お父さんの呼ぶ声がしたので、部屋に入る。彼の横に座るように言われて座る。

「ふつつかな娘ですが、よろしく頼みます。」
「こちらこそ、大事なお嬢さんを遠い所へ連れて行って申し訳ありません。」

いったい、どうなってるの？？？？これって許してもらえたって事？？？？？？

後でお父さんに聞くと、毎晩私がいないと彼の実験はすすまない、仕事も手につかないと延々と話されたらしく、ついに根負けしたらしい。これだけ誠実な人なら大丈夫と太鼓判を押してくれた。

彼がシカゴに戻って1ヵ月後、私もシカゴへと旅立つ。
彼からもらった手紙を胸に・・・・・・・・・・・・・
そこには風変わりな彼からの桜のポストカード。シカゴにも桜はあ

るみたいだ。ポストカードには
「早く、君と二人でこの桜を眺めたい。急げ、シカゴへ！」
なんとも彼らしい言葉である。私も期待と不安を胸に彼のもとへと急ぐ。
満開の桜が散る前に・・・・・・・・・・・・・・

（後書き）

つたない話を読んでいただいてありがとうございます。
まだまだ、表現が上手く言い表せません。
ぜひ、感想をお聞かせください。
よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9527d/

忘れえぬ君へ

2010年11月24日16時06分発行